

5. 再生の提案(表-1)

課題に対する再生手法の提案として、4つを挙げる。

都市の中で唯一の公共の自然空間である河川においては、リバーウォークや多自然型川づくりとして設ける。このリバーウォークや多自然型川づくりは、内陸と海辺を繋ぐ重要な役割を担うと考えている。

内陸に住宅や商業用地が多くあるエリアにおいては、ベイウォークを提案する。これは人々に公有の海辺を開放し、アクセスできるようにするものである。人々が行きかうこのエリアでは、海辺を全面的に開放するベイウォークが必要であると考えます。

工業用地が建ち並ぶエリアにおいては、唯一残されているアクセポイントを有効に使う海の一里塚を提案する。さらに長期的に考えた場合、東京ベイエリアの千葉県千葉中央港より南側では今後、大規模工場の後進や人口減少の可能性が考えられる。これらの条件を考慮すると、ハーバーウォークだけではなく、自然への再生が検討されてよいと考えられる。そこでラグーンを提案する。埋め立てられた土地を削って緩やかな傾斜にし、埋め立て前のような浅瀬の干潟にすることや、土地そのものを掘り込み、小さな湾を形成するものである。

このように水辺を、内陸にある公園や残された自然と共に整備することで水と緑のネットワークが形成され、自然の再生と共に、自然を人々や開放することができる（図-3）。

6. 結語

東京ベイエリアでは、局所的に整備され人々に開放されている場所もあるが、多くは工業用地が建ち並んでいる。現状分析から課題として、①遠浅の海辺が消失してしまったこと、②人々の水辺への自由なアクセスが不可能になったこと、③海辺が内陸と海を分断していることがある。これを、リバーウォーク、多自然型川づくり、ベイウォーク、海の一里塚によって水と緑のネットワー

クを形成することにより、人々へ開放された東京ベイエリアを目指した。

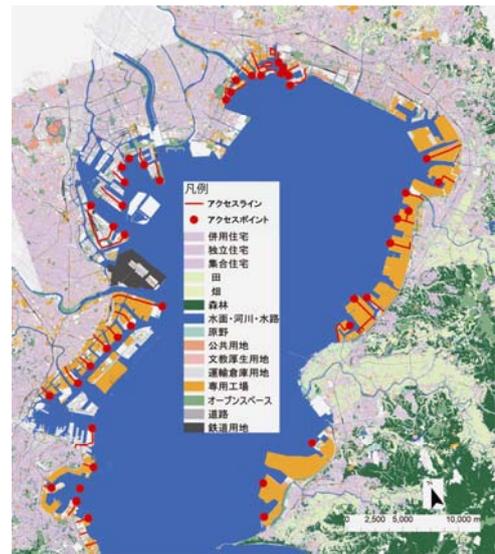


図-3 東京ベイエリア現状図



図-4 東京ベイエリア水と緑のネットワーク

参考文献

- 1) 吉川勝秀：『流域都市論』、鹿島出版会、2008、
- 2) Reiko SAINO、 Mamoru MIYAMOTO and KATSUhide YOSHIKAWA、 Evaluation and Development a Water and Greenery Network in Tokyo Bay Area Especially Chiba Prefecture、 Environmental & Water Resources Institute of ASCE、 2008

表-1 東京ベイエリア整備の提案

目的	場所	方法	内容
水際の開放	河川、運河、水路	リバーウォーク	全区間において再生するものやスポット的に再生するものがある。河川沿いに通路を設ける。
	住宅・商業用地エリア	ベイウォーク	現在の直立な海岸線上の通路や、直立な護岸に捨石をして緩やかな傾斜による多孔質な空間を形成する。
	工業用地内のアクセスポイント	海の一里塚	直立護岸の上から海を展望できるものや、直立護岸に捨石をして緩やかな傾斜による多孔質な空間を形成するもの、海に接することができるもの。
水際の自然再生	河川、運河、水路	多自然型川づくり	全区間において再生するものやスポット的に再生するものがある。潮の満ち引きによって水面上にできる形状の干潟や、捨石をして多孔質な空間を形成する。